

## 「教職実践演習」において求められる学びとは

### — 学生による協働的な学びの効果とその必要性 —

粕谷直正

Key words ; 教職実践演習、振り返り、協働的な学び、PDCA サイクル、自己受容

#### 1. はじめに

近年のグローバル化、情報化、社会全体の高学歴化等による産業構造の高度化や社会構造の変化は、全世界で急速に進んでいる。国際的な競争力を維持していく上で、これらの時代の変化に対応できる高い資質能力を有する人材を育成することは、日本の教育界にとっても重要な課題である。そのため、教育活動の直接の担い手である教員には、教職に対する強い情熱、教育の専門家としての確かな力量、総合的な人間力など、より高い資質能力を備えていることが求められている。文部科学省の中央教育審議会は、これからの社会の進展や将来の学校教育の姿を展望しつつ、今後の教員養成・免許制度の在り方について検討する必要があるとして、2006年7月に「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」をとりまとめた。ここでは、今後の日本の教員養成・免許制度の改革の基本的方向を示すとともに、教員養成における専門職大学院の在り方や教員免許制度の改革、教職課程の質的水準の向上や採用、研修及び人事管理等の改善・充実など、教員の資質能力の向上を図るための総合的な方策についてまとめられている。この教員養成・免許制度の改革では、「大学の教育課程を、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせるものへ」と「教員免許状を、教職生活の全体を通じて、教員として最小限必要な資質能力を確実に保障するものへ」の2つの方向から進めることが適当としているが、養成校における教職課程の質的水準の向上策の1つとして、教員として必要な資質能力の最終的な形成と確認のため、教職課程の新たな必修科目である「教職実践演習」を新設し、必修化することが提言された。そして、この事項を制度化するため、2009年7月教育職員免許法施行規則が改正され、「教職実践演習」が新設されることとなった。

この「教職実践演習」は、全ての科目を履修済み、あるいは履修見込みの時期である4年次後期に設定することが適当であるとされ、その趣旨を以下のように説明している。

教職実践演習(仮称)は、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。<sup>1)</sup>

また講義内容には、教職課程の他の科目と同様に、教員として求められる4つの事項「使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「教科・保育内容等の指導力に関する事項」を含めることが適当であるとしており、養成校が有する教科に関する科目および教職に関する科目の知見を総合的に集約しつつも、教職経験者を指導教員に含めるなどして、現場の視点を取り入れながら内容を組み立てていくことが必要

であるとしている。さらに授業方法としては、講義だけではなく、ロールプレイやグループ討議、実技指導や事例研究、フィールドワークや模擬授業等を取り入れて行うなど、各養成校が工夫をして取り組んでいくことが求められている。

そこで本論では、まず養成校における教職実践演習の様々な取り組みについて概観したのち、筆者が前任校にて担当していた授業内容について、学生による授業の振り返り内容等から分析を行うことを通して、教職実践演習ではどのような学びが求められるのかについて考えていきたい。

## 2、教職実践演習における各養成校の様々な取り組み

教職実践演習は、専門学校と短期大学では2011年から、大学では2013年から開講された科目である。そのため、授業に対する様々な取り組みやその検討内容等については、各養成校から報告がなされている。そこで、まずは初等・中等教員養成課程では、具体的にどのような取り組みが行われているのかについて概観していくこととする。

吉田・中尾(2016)は、模擬的な教育環境として学校行事を想定・構築し、受講学生が協働して実際に子どもと関わる行事を沖縄こどもの国とともに企画・運営することで、教員に必要な指導力等を確認するという工夫された取り組みを2012年度より教職実践演習の授業内にて行っている。その授業目的を達成しているか確認するために、2014年度の実践が受講学生の受講前後段階での自己分析にどのような影響を及ぼしているのか、また教員として求められる4つの事項の修得状況をどのように自己評価しているのか、一連の実践後の自己評価と他者評価の差について量的・質的に検証している。その結果、受講学生自身は受講前よりも受講後の方が「自身には教員として必要な能力が身につけている」と自己評価しており、その変容の様子は自己評価よりも他者評価の方が高くなることが明らかとなったとしている。自己評価よりも他者評価の方が高くなったのは、自らの活動を振り返り、今の自分に足りないものを把握し、改善策を提示できるようになったとともに、自己評価の基準が厳しくなったのではと推測している。このことから、実際の行事運営を通して、教職を目指す者に必要な資質能力の定着を履修した学生全員から確認することができたとしている。

また小林・寺田(2014)は、授業履修学生の所属研究室の専門性を活かし、小学校図画工作科・体育科・音楽科の3つの授業を観察したのち、①履修学生に授業観察時の「気づき」を付箋紙に記入させる、②「気づき」に基づいたグループディスカッションを行う、③観察した授業を模造紙に図式化するという手順で授業分析を行うことで、教科指導に関する事項として授業力を中心とした教師の力量形成を試みている。その結果、「私的言語」(教師の経験に基づいた、授業に対する自分なりの気づきを記述する言語)で授業を語ること、子どもの視点を含む指導意識、系統的・計画的・構造的に授業を捉える力、専門的視点の共有は、授業力を中心とした教師の力量を向上させる上で重要であることが確認できたとしている。

では次に、幼稚園教諭・保育士養成課程では、具体的にどのような取り組みが行われているのかについて概観していくこととする。

畠山・西田(2014)は、2011年から3か年にわたる授業実践の成果を基にして、「保育・教職実践演習(幼)」における今後の実践上の3つの課題について検討している。まず、『「ティーム・ティーチング」という授業形態の再点検』についてである。1つの授業を2名の教員で実施しているという特性上、相互の授業方法をより丁寧に理解した上でカリキュラム構成ができる反面、相互チェックの視

点が固定化され、新たな課題が見えにくくなっているという欠点を挙げている。そのため、授業を動画記録して授業検討会を行ったり、詳細な授業記録を作成し、その構造分析を行ったり、関連学会や学外の研究会等で成果報告を行い、授業内容を検討したりなどの機会をもつことが必要だとしている。次に、「外部講師の授業と他の授業回と密接な関連性をもたせること」についてである。外部講師には、実践的な話題提供をお願いしているが、その前後の授業回において学生にとって関連付けられた経験の場を提供できるように工夫することが必要だとしている。最後に、『「教材」作成のさらなる工夫』についてである。この授業で用いる教材は、保育者としての専門性に気づいたり、保育実践の奥深さを実感したりといった、学生にとって「認知的な変換」をもたらす役割を果たす必要があるため、当該科目における「教材」のあり方を実践に即して絶えず検証していく必要があるとしている。

また、岡崎女子短期大学にて教職実践演習を担当している教員グループは、教職実践演習が開始された2011年度より授業の実践報告や授業効果についての研究等を継続して行っており、2016年からの3年間は、文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」で示された教職実践演習の4つの到達目標が授業内で達成できているかについて検証が行われている。まず山田ら（2016）は、教職実践演習（幼稚園）のねらいの1つである学級経営の視点の深まりに着目し、毎授業後（全16回分）に行う学生の質問紙調査への回答内容の変化から、本授業における集団での学びの効果、協同学習の意義について検討を行っている。その結果、全体を通して集団を意識した活動が展開されており、協同学習の効果を読み取ることができたこと、また学生が集団の中で他者を意識して様々な立場を経験したことで、多角的な目を持ち、様々な立場で自らの役割を果たそうとする姿勢をもてるようになったこと、さらには適宜振り返りを行うことで、より集団での学びが深まることが明らかとなったとしている。続けて山田らと共に教職実践演習を担当している横田ら（2017）は、山田ら（2016）の研究では焦点を当てなかった使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、幼児児童理解や学級経営に関する事項を加え、学生の質問紙調査への回答内容の変化から、より広い視点で協同学習の意義や効果について検討を行っている。その結果、集団の中でロールプレイを繰り返すという協同学習によって、より実践を意識した活動が展開され、全ての事項で学びが深まっていたことが明らかとなったとしている。さらに横田ら（2018）は、昨年同様3つの事項についての継続調査を行うとともに、昨年研究では焦点を当てなかった教科・保育内容等の指導能力に関する事項と保育者効力感尺度を加え、学生の質問紙調査への回答内容の変化から、より広い視点で協同学習の意義や効果について検討を行っている。その結果、到達目標の全ての事項と保育者効力感尺度で事前、事後で有意な差が認められたことから、本授業が文部科学省の趣旨と合致するものであり、学生における学びの効果を保障するものであることが明らかとなったとしている。

これらの先行研究に共通する点は、文部科学省中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」で示された教職実践演習の4つの到達目標に基づき、授業内容や授業方法等について具体的に検討されていることである。その中でも、多くの研究では仲間や教師、子ども等との関わりから生じる様々な学びの方法の重要性について論じている部分が多くみられた。例えば吉田・中尾（2016）では沖縄こどもの国における行事運営を通して、また小林・寺田（2014）では授業観察後の学生同士のディスカッションを通して、さらには山田ら（2016）、横田ら（2017, 2018）では園見学や幼児教育祭へ向けた学生や教員等との様々な話し合いやロールプレイ、計画・実践・評価・改善

の PDCA サイクルを重ねた取り組みを通して授業計画が作成され、その学びの効果が検討されている。しかし、これらの研究の多くが質問評価用紙を用いた数量的分析手法、または初回と最終回に提出する課題レポートを用いた質的分析手法が用いられているものの、インタビュー等による質的分析手法を用い、学生の変容等に焦点をあてた具体的な研究は行われていない。

そこで今回は、「仲間や教師、子ども等との関わり」に焦点をあて、学生が授業履修後に提出したレポート記載内容、またそのレポート記載内容を基にした学生に対するインタビュー内容を基にして、筆者が行った教職実践演習の授業内容とその学びの効果について検討を行うこととする。

### 3、研究の対象・方法

研究対象となる授業「教職実践演習（幼稚園）」の 2015 年度履修者は 11 名であったことから、本研究では履修者個々に焦点をあてた質的研究を行うこととした。そこで、学生が授業履修後に提出したレポート記載内容、またそのレポート記載内容を基にした学生 4 名に対するインタビュー内容を「振り返りの 9 つの視点」（表 1 参照）にわけて分析を行うこととする。

分析対象となったレポートは、学生がこれまでの授業等への取り組みについて時系列ごとに振り返り、その内容を自由記述によりまとめたものである。振り返りの 9 つの視点は、事前にレポート用紙に記載しておいた。また、レポート用紙は、授業最終日（15 回目）に学生へ配布し、後日（約 1 週間後、2016 年 1 月末）に提出・回収された。さらにその後、学生のレポート記載内容を踏まえ、学生 4 名に対しては、授業担当者である非常勤教員とともに半構造化インタビュー（2016 年 3 月初旬）を行い、9 つの視点について具体的なインタビュー調査を行った。なお、録音したインタビュー音声は不明瞭で聞き取りづらい箇所は、発話の長さに応じて「@@@」と表記することとした。

本授業は、大きく分けて「幼児たちに対する自己紹介」、「指導計画案作成と幼稚園における部分実習（個人とグループ、各 1 回）」、「ペープサートの製作と実演」「各活動の振り返りとグループ討議、評価」を中心に行った。これらの具体的な内容は、学生たちが「教員として最小限必要な資質能力」をどの程度備えているのかについて、履修カルテ等を基に担当教員が話し合いの上、各年度に応じて決めている。また、活動の単位としては、「個人での活動から集団での活動」とし、これらの活動を通

表 1 振り返りの 9 つの視点

振り返りの 9 つの視点	
(1)	(受講前) この授業に対して考えていたこと (授業内容に対するイメージ、授業に期待していたこと等)
(2)	(履修カルテの記載内容を通して) 幼稚園教諭となるために「自身が課題とすること」は何か
(3)	幼稚園教諭となるために、受講前まで準備したこと、心掛けてきたこと (具体的に何か準備をしたこと)
(4)	(自身の) 授業のねらい (今回具体的に経験、達成したかったこと)
(5)	受講中の自身の変化 (初期・中期・後期等)にわけて考え方の変化を記す)
(6)	授業時間内外の仲間との関わり (思い出に残る言葉、実践等)
(7)	授業時の先生方との関わり (思い出に残る指導の内容等)
(8)	授業を受講し終えて感じること (反省、自身の気持ちや考え方の変化、この授業で学びかったこと等)
(9)	(教職に就くにあたっての) 今後の課題

表2 2015年度 教職実践演習(幼稚園)の授業展開内容

		2015年度 教職実践演習(幼稚園) 授業展開内容		担当教員: 粕谷亘正・岩崎淳子 受講者数: 11名	
		授業内容	次週までの課題	活動の流れ	活動の単位
1	9月29日	オリエンテーション 履修カルテ記載	「自己紹介」内容の検討		
2	10月6日	就職圏での幼児への「自己紹介」(個人)	〃	①	個
3	10月13日	〃	部分実習(部分)の準備		
4	10月20日	部分実習の準備(指導案作成、教材作成、模擬保育等)	〃	②	個 ↓ ↓ グループ
5	10月27日	〇〇大学幼稚園における部分実習(個人)① 4クラス(年中、長)×1~2名 その後グループ討議、ビデオ視聴	部分実習の反省・課題レポートの作成 (部分実習の記録・考察の作成)		
6	11月10日	〃 ②	〃		
7	11月17日	〇〇大学幼稚園における部分実習(個人)の振り返り(指導計画案、指導方法等) ペープサート発表内容の検討、準備	ペープサート発表の準備	③	
8	11月24日	ペープサート発表内容の検討、準備	〃		
9	12月1日	ペープサート「ねずみくんのチョコキ」実演、討議 1回目	〃		
10	12月8日	〃 1、2回目	〃	④	グループ
11	12月15日	〃 2回目	部分実習(グループ)の準備		
12	12月22日	部分実習(グループ)での話し合い、準備、模擬保育	〃		
13	1月12日	〃	〃		
14	1月19日	〇〇大学幼稚園における部分実習(グループ) 4クラス(年中、長)×1 その後グループ討議、ビデオ視聴	〃		
15	1月26日	これまでの活動をビデオで振り返る 教員によるペープサート(パネルシアター)実演 グループで丸くなって、話し合い	レポートの作成		

して「仲間や教師、子ども等との関わり」が自然と生み出される内容となるよう計画した。さらにそれぞれの活動は、一度きりで終わるのでなく、活動を振り返り、同様の活動を繰り返して行うことができるように計画した。(表2参照)

#### 4、研究の内容

以下では、学生が授業履修後に提出したレポート記載内容、またそのレポート記載内容を基にした学生4名に対するインタビュー内容を「振り返りの9つの視点」にわけて分析・考察を行っていく。

(1) (受講前に) この授業に対して考えていたこと

(授業内容に対するイメージ、授業に期待していたこと等)

《レポート記載内容から》

今回、授業を受ける前までに、授業内容としては大量に指導案を書き、4・5回程、幼稚園にお伺いするのだと思っていました。私自身、指導案1枚を仕上げるのにかなり時間がかかるので、とても不安に思っていました。また、グループでも指導案をまとめ、実習するということも前もって聞いていましたが、そこでも周りと意見が違って迷惑をかけたらどうしようなどと思っていました。指導案に関してだけではなく、製作活動に関しても不安がありました。何かを作ることにについては得意なのですが、どんなものを作るか、どんなものが指導案のねらい達成に適しているのかを考え、選ぶことが苦手で、そこでつまづいてしまうのではないかと思っていました。(Hさん)

私は、この授業に対して、いよいよ就職にかかわっていく、学生最後の集大成になる授業であるという思いを持っていました。今までの実習などでできなかったことが自分の中にあり、それをできるようになりたいと思っていました。(Kさん)

粕谷先生とI先生の2人で指導して下さるということで、様々な考えや方法を教えて頂きたいという気持ちを持っていました。また、この授業はこれまで大学で学んできたことのまとめのようなイメージも持っていた。(中略) 将来、自分が幼稚園教諭になった際に使える遊びや活動、指導法等を身につけられることを期待していた。(Tさん)

幼稚園に行く(就職する)ということは、何か用意しなくてはいけないと思ひ、何を準備したらよいかを考えていました。その時にしか使えないというものではなく、これから先、現場で使うことができるものを授業内で用意することができると期待していました。授業内に用意することができると、自分だけの考えで進めるのではなく、周りの意見を聞きながら、それを参考に作っていくことができるため、偏ったものではなく、バランスのとれたものが用意できると考えていました。(Mさん)

《インタビュー内容から》

Sさん：小学校と反対のが幼稚園だったから、小学校で模擬授業たくさんやるっていう感じだったから、じゃあ模擬保育いっぱいやんのかなあっていうイメージが。

Uさん：私もそう思った。学生と…っていうか学生だけの中で…。

Sさん：そう、(学生だけで)やるのかなあって思っていました。

Tさん：私は何か先輩とかから、「実際に幼稚園行ってやるよ〜」みたいな話を聞いてたんで、もうそれは知ってたんですけど、あとはあのHさんと一緒に指導案をいっぱい書いたりするのかなっていうイメージと、あとは何かこう、今までの何か全部のまとめみたいな、就職へ向けてのまとめの授業なのかなっていう感じの印象でした。

Uさん：何か、実習(正規の実習ではない)が2週間しか無かったので、何だろ、幼稚園に実際に行ける機会があるっていうのは凄いな、何か大きいなあって思っていました。貴重な経験だなあって、@@@@@そうだなあっていうのは思っていました。(中略) だから、幼稚園へもうちょっと何回行くのかなって、私はイメージ的には思っていました。

以上の内容から、学生たちは本授業を受講するにあたって様々な「不安」と「期待」を抱いていたことが分かる。例えば、Hさんは「大量に指導案を書き、4・5回程、幼稚園にお伺いする」「グループでも指導案をまとめ、実習するというを前もって聞いていましたが、そこでも周り意見が違って迷惑をかけたらどうしよう」という不安、Sさんは「小学校で模擬授業たくさんやるっていう感じだったから、じゃあ模擬保育いっぱいやんのかなあっていうイメージ」、Kさんは「いよいよ就職にかかわっていく、学生最後の集大成になる授業であるという思い」を持っていたという。それらは、サークルの先輩、同学科に在籍していた2つ年上の姉、他大学に通い「教職実践演習」を受講した姉、小学校課程用に設置された「教職実践演習(小学校)」を受講した先輩の話から、本授業に対して「不安」なイメージをもっていたようである。またその一方で、Kさんは「今までの実習などでできなかったことが自分の中にあり、それをできるようになりたい」という思い、Tさんは「将来、自分が幼稚園教諭になった際に使える遊びや活動、指導法等を身につけられること」、Mさんは「周りの意見を聞きながら、それを参考に作っていくことができるため、偏ったものではなく、バランスのとれたものが用意できる」、Uさんは「幼稚園に実際に行ける機会があるっていうのは凄いな、何か大きいなあって思っていました。貴重な経験だなあって」等という期待を持っていた。他の学生のレポートにも同様な「不安」と「期待」に関する記載が多くあった。

「不安」については、インタビューでも語られていたが、初回授業時に配布された授業予定表を確認した後に、幼稚園での部分指導や指導計画案作成数等がそれほど多くないことが分かる、少しは和らいだようである。また、「学生最後の集大成になる授業」であると認識していた学生も何人かおり、

本授業の位置づけを事前に理解して受講していること、さらには将来保育現場で働くことを想定し、主体的に授業を受講しようとする姿、仲間の意見を聞きながら保育教材を作成していこうとする姿、幼稚園での部分保育を授業内で行う機会が設けられていることへの期待感など、学生たちは本授業に様々な「期待」をもって主体的に受講しようとする姿があることが分かった。ただ、なかにはTさんのように「粕谷先生とI先生の2人で指導してくださるということで、様々な考えや方法を教えて頂きたいという気持ちを持っていた」のように、担当教員より一方的な指導を求めようとする受動的な姿も見られ、本授業の位置づけや詳細な授業内容について、初回授業で改めて丁寧に伝えることで、学生の受講姿勢を形成していく必要があると感じた。

(2) (履修カルテの記載内容を通して) 幼稚園教諭となるために「自身が課題とすること」は何か  
《レポート記載内容から》

私が幼稚園教諭として働き始めたら、子ども一人一人を理解し、関わっていきたくと考えている。(中略) そのため、子ども一人一人を十分に理解し、子どもたちの状態に合った関わり方や環境構成ができるような保育者になりたい。(Tさん)

活動をする上での環境をきちんと構成することが、課題と考える。絵本や紙芝居を見せる場合には、子どもの高さは合っているか、声の大きさは適当かを事前に考え、環境構成することで、子どもたちが楽しんで活動に参加できるだろう。実際に、保育参観時の全日経営などで感じた反省点もあるので、きちんと達成できるように努めたい。(Fさん)

一度学んだことを終わったらもうやらないではなく、何度も繰り返し学ぶことだと思います。(中略) 何事もその時だけではなく、繰り返し復習をし、改善・修正していくことが大切であると考えます。(Mさん)

私が課題とすることは、様々な視点で物事を考えることです。(中略) (実習経験を踏まえ、) 自分が予想していなかったことがたくさんあって、もっと子どもたちの視点に立つことや様々な視点から物事を考え予想しなければいけないと思いました。(Sさん)

《インタビュー内容から》

Hさん：何かその絵本を読んで、こう、子どもたちにこう思ってもらいたいとか、こういう学びがあって欲しいなあと思ってチョイスしたりするじゃないですか。(中略) みんながどう思ったのかっていうのを聞きたいなあと思って、私は声掛けをするんですけど、そういう時に何か、「どうだった？」って聞いてしまうのか、絵本の中身をこう、何か中で一番伝えたいところで「ここはこういう場面だったね～」とかで伝えるのかっていうところがまず迷うのと、自分はこの展開をしたいっていうある程度頭の中で考えてあるのと、やっぱズレるじゃないですか。そうズレた時にフォローができないというか、次の言葉が浮かんでこない…。で、そこでまずいて、時間が経つと、子どもたちがびびびびびびって出てきちゃって、「あららら、もう…」みたいな。収集つかなくなっちゃった～って思ってた…。で、一人の言葉を聞こうって私は思ってた、そうするともう頭の中ゴツチャになって、「あれ、結局何だっけ？」みたいな。で、軸がズレて、結局子どもたちの中で何が得られたのかが分からなくて、「楽しかったね！」で終わっちゃうんです。

Sさん：(教育実習先で) フルーツバスケットを3歳児さんでやったんですよ。(中略) 私の中では、じゃんけんして勝った人がこれをするみたいな…。(中略) 実際にやってみた。そしたら何か、じゃんけんはできるんです、3歳さん。だけど、先生に勝ちたいから、グー出したらグー出してるのにパーって変えたり。で、勝った人だけで、多い時は勝った人だけでやるよって言ってまたじゃんけんするんですけど、あいこの子も一緒にやったり、負ける子も一緒にやったり、なかなか決まなくて…っていうのが一つ。できるって思ってたから、そのことを考えてなかったから、その場で「あ、どうしよう」みたいな感じになっちゃって…というのが一つ。(後略)

Sさん：私、凄く緊張しやすすいタイプだから、発表もいっぱいあるだろうし、幼稚園も行くだろうから、まあ少しは前に出るっていうのが慣れるのかなあって。

以上の内容から、学生たちは履修カルテの記載内容を通して、「幼児理解」「環境構成」「援助技術」「教材研究」「学びの姿勢」等を幼稚園教諭となるための課題と考えていたことが分かる。例えばTさんは、「子ども一人一人を十分に理解し、子どもたちの状態に合った関わり方や環境構成ができるような保育者になりたい」として、幼児理解に基づいた援助や環境構成を課題としている。またFさんは、「活動をする上での環境をきちんと構成すること」として、これまでの保育経験を振り返り、子どもたちが楽しんで活動に参加するための教材研究と環境構成を課題としている。さらにMさんは、「一度学んだことを終わったらもうやらないではなく、何度も繰り返し学ぶこと」として、学びの姿勢を課題としている。加えてHさんとSさんは、これまでの保育参観や幼稚園実習における保育経験等から、幼児理解に基づいた教材研究、意図をもった保育者としての具体的な子どもたちとの関わり方やその構え等を課題としている。

このように学生たちは、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動、実習内容等を振り返り、幼稚園教諭となるには何が不足しているのかなど、履修カルテの記載内容を通して各自の課題を客観的に捉えようとする姿が見られた。特にHさんの課題は、実習等での経験を踏まえつつも、子どもを主体とした保育をどのように構想していくべきなのかという視点から、より実践的かつ具体的な課題を見出すことができている。ただ、その課題自体が漠然としているTさんや「幼稚園にも行くだらうから、まあ少しは前に出るっていうのが慣れるのかなあって」というSさんのように、経験主義的な思考をする学生も少なからずいることが分かった。これは、学科の方針として幼稚園・小学校教諭の両免許を取得予定の学生は、必ず小学校実習を履修しなければならず、幼稚園実習は履修不可であること、また幼稚園実習を履修していない学生であっても、幼稚園への就職を希望する学生は「教職実践演習(幼稚園)」を履修するという教職課程運用上の問題も影響していると考えられる。今後は、教職運用上の問題改善に加え、これまで学生が身に付けた資質能力と「教員として最小限必要な資質能力」とを比較し、今後教師となる自身の具体的な課題を見出すことができるような履修カルテの記載項目の見直し、その利用方法の工夫等を含めた検討をする必要があるだろう。

(3) 幼稚園教諭となるために、受講前まで準備したこと、心掛けてきたこと  
(具体的に何か準備をしたこと)

《レポート記載内容から》

私はサークルでの活動で、製作活動の基本的な知識を得られたと思っています。(中略) また、サークルでの活動の中で、絵本の読み聞かせをしたり、紙芝居を読んだり、ペープサート、人形劇など様々な活動を経験したことで、自分にできる活動の引き出しが増えたと思っています。(Hさん)

絵本を買ったり、知識を増やすこと、就職先の幅を広げるために保育士資格の取得のために勉強をし、保育士試験を2度受けました。(中略) 実習などを通して、普段の自分の癖がふとしたときに出てきてしまうことが分かり、普段から言葉遣いを丁寧にしておくことを心掛けました。(Yさん)

何事にも準備を怠らないということである。(中略) 例えば、大学の授業で行われる模擬授業や教育実習の際、より分かりやすくなるよう子ども全員分の教材を作ったり、子ども達が楽しく活動したり、学んだりできるよう、自分で考えて教材を工夫するなどしてきた。(Tさん)

大学の音楽の授業以外でも、自分の好きな曲や子ども向けの曲の楽譜を購入し、空いている時間に弾いてみたり、気分転換として弾いてみたりしながら、ピアノを弾く習慣を保ち続けました。(Uさん)



実際に子どもたちと関わり、子どもたちに教えるという難しさや子どもたちが楽しいと感じるためにはどうしたらいいのか考え、体験してきたことです。私は将来、子どもたちと関わる仕事をするので、アルバイトをする時に、子どもたちと関われるアルバイトをして実際に体験をしようと考え、スイミングスクールの先生を始めました。(中略) 子どもたちが飽きないようにメニューを考え、難しい言葉は伝わらないので、分かりやすい言葉にしたり、毎回、試行錯誤しながら練習を進めています。(中略) アルバイトを通して、子どもたちの実態やねらい・内容、子どもたちの予想される行動・発言、保育者との関わりなど予想することが少しできるようになり、初めて指導案を書いた時よりは、書けるようになっていっていると感じています。(Sさん)

1日のボランティアを数回行い、行事の際の保育者の仕事や園の様子を観察していました。(Kaさん)

《インタビュー内容から》

Uさん：サークル、私は凄く、先輩とのかかわりがあったな～って思いました。

何か、先輩が色々教えてくれたよね？(中略)

Hさん：たぶん、このサークル無かったら、壁面未だにクソ下手くそですよ。

Sさん：あ～、それでも分かるかも～。

Hさん：ここでめっちゃパーツくっ付けてやってけまいいんだとか、先輩の作ってるの見たから～、あれだけど。

Uさん：う～ん。そう、やってたね。

Sさん：確かに。実習行った時も壁面作らされて、「これ作っというて」って言われて。(サークルで) やってたから、作れたけど…。

Hさん：そう。チャッチャッチャット作れるけど…。

Uさん：そうそうそうそうそう。

Hさん：あの経験はおっかったよ。

Sさん：確かに。

Uさん：先輩たちから授業の話聞いたりとかできたりして。

Sさん：それもおっかいよね。

Hさん：それは、良かったよね～。

Sさん：実習の相談とかもできたし。

以上の内容から、本授業受講前に学生たちは幼稚園教諭となるために「サークル活動」「保育知識・技術の習得」「保育士資格取得のための学習」「普段の生活の見直し」「子どもと関わることのできる機会の確保」等を行うことを心掛けてきたことが分かる。例えばHさんは、「サークルでの活動の中で、絵本の読み聞かせをしたり、紙芝居を読んだり、ペープサート、人形劇など様々な活動を経験したことで、自分にできる活動の引き出しが増えた」としており、同じサークルに参加していたUさん、Sさんもインタビューの中で同様の発言をしている。またYさんは、「絵本を買ったり、知識を増やすことと、就職先の幅を広げるために保育士資格の取得のために勉強」を、Uさんは「空いている時間に弾いてみたり、気分転換として弾いてみたりしながら、ピアノを弾く習慣を保ち続けました」などのように、保育知識・技術の習得や保育士資格にも励んでいる。さらにTさんは、「大学の授業で行われる模擬授業や教育実習の際、より分かりやすくなるよう子ども全員分の教材を作ったり、子ども達が楽しく活動したり、学んだりできるよう、自分で考えて教材を工夫する」などのように、普段の準備を怠らないようにしたり、Yさんは「普段から言葉遣いを丁寧にしていくことを心掛け」たりするなど、学生生活における自身の生活を見直している姿もあった。加えてSさんは、「アルバイトをする時に、子どもたちと関われるアルバイトをして実際に体験をしようと考え、スイミングスクール

の先生を始め」たり、Kaさんは「1日のボランティアを数回行い、行事の際の幼稚園教諭の仕事や園の様子を観察」したりするなど、子どもたちと関わる機会をつくることで、子どもたちとの関わり方や実際の指導方法、園の様子などについて学んでいこうとしている。

このように学生たちが、幼稚園教諭となるための学びを主体的に行おうとする姿が醸成され・維持されたのは、もちろん幼稚園教諭を目指そうとする学生たちの強い意志があったからであるが、彼らが主体的に立ち上げたサークル活動での経験による部分も大きいのではないかとインタビュー内容からも推測することができる。サークル活動においては、壁面づくりや工作遊び、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアター、絵本の読み聞かせや手遊び発表など、保育教材作成や保育技術の向上が主な活動内容であり、それらの経験は大学の授業内でも学ぶことのできない貴重な経験であったと述べている、また、それらの活動のなかで、幼稚園教諭を目指す先輩方から授業や実習、就職や幼稚園などの話を聞いたり、幼稚園教諭となった先輩方から保育現場での具体的な話などを聞いたり、また幼稚園教諭を目指すサークルの仲間と活動を共にし、語り合ったりしてきたことも重要な経験となったであろう。これらの経験を経ることで、学生たちは次第に各自が幼稚園教諭として必要とされる具体的な資質能力について気づくことができたとともに、それらを身に付ける必要性を感じられたからこそ、今回のようにそれぞれが具体的な目標を掲げて主体的に学びを進めていくことができたのではないだろうか。

#### (4) (自身の) 授業のねらい (今回具体的に経験、達成したかったこと)

《レポート記載内容から》

子どもと実際のやりとりを通して、子どもの姿を捉えること、そしてそれを踏まえた上で指導計画が書けるようになりたいというねらいがありました。また、自己紹介やペープサートでの使用物は、「実際の現場に出たときも使えるようなもの」という先生の話聞き、自分の納得のいくものを丁寧に作成していきたいと考えていました。また、ペープサートでの発表では、自分の課題でもある演じることに抵抗をなくすことをねらいとして考えていました。(Uさん)

模擬保育を通して、活動の中での子どものやり取りや教材を作る上での工夫、子どもたちへの具体的な配慮点について学び、身につけたいと考えていた。特に教材作り際には、子どもたちをどう引きつけるか、どうすれば楽しめるかの工夫をしたり、年齢ごとに配慮すべき点を考え、活動中の声掛け、環境づくりに活かせるようにすることを私の本授業におけるねらいとしていた。(Fさん)

今回の授業全体を通して、指導案→準備→活動→反省という流れを2回行うことができると分かり、計画性を持って活動していこうと思っていました。(Hさん)

この授業で少しでも自分に自信を持ちたいとも思っていた。私は自分に自信が持てずいたため、実習の時にも不安な気持ちばかりを持っていて。そこでこの授業で、実際に幼稚園に行つての活動や、実践的な活動を行い、その経験から少しでも自信につなげられたらと思っていた。(Tさん)

友達の発表や実習をみて、自分では考えつかなかったことや言葉かけなどを次の発表や実習に取り入れていくことを目標にしていました。(Sさん)

《インタビュー内容から》

Uさん：たぶん、恥ずかしさが一番おっかしい。人前…、何か誰も居ない所だったらまだできるかもしれないけど、人が見てる前で何かこう、声色変えたり、何か演じるってのが。何だろ、人前に出るとできなくなるっていうのがあって、最初から。で、先輩の観て、「あ〜、何であんな風にできんだろうなあ」といつも思っていて。それは一番課題でした、私は。はい。で、抵抗が無くせたらなあっていう風には考えてました。う〜ん、何か理想の読み聞かせ像みたいな、それが何かたぶん先輩とか、Hさんも読み

聞かせ上手で、Hさんとか先輩があるんですけど、そこにも近づいていきたいなあっていう風に考えてたんですけど。

以上の内容から、学生たちの本授業におけるねらいは、「模擬保育を通した指導計画の作成や保育教材・技術の習得」「PDCA サイクルを通した計画的な学び」「様々な経験を通して自信を深める」「友達の良い点を取り入れて、自身の活動を行う」等であったことが分かる。例えばUさんは、「子どもとの実際のやりとりを通して、子どもの姿を捉えること、そしてそれを踏まえた上で指導計画が書けるようになりたい」とし、Fさんは「模擬保育を通して、活動の中での子どものやり取りや教材を作る上での工夫、子どもたちへの具体的な配慮点について学び、身につけたい」として、模擬保育を通した指導計画の作成や保育教材・技術の習得を目指している。またHさんは、「今回の授業全体を通して、指導案→準備→活動→反省という流れを2回行うことができると分かり、計画性を持って活動していこうと思っていました」として、授業担当者が意図して計画したPDCAサイクルを通した学びに対して、計画性をもって取り組んでいこうとしている。さらにTさんは、「この授業で、実際に幼稚園に行つての活動や、実践的な活動を行い、その経験から少しでも自信につながれたらと思っていました」とし、Uさんは「(人前で演じることの)抵抗が無くせたらなあっていう風には考えてました」として、模擬保育や発表等の様々な経験を通して自信を深めることをねらいとしている。加えてSさんは、「友達の発表や実習をみて、自分では考えつかなかったことや言葉がけなどを次の発表や実習に取り入れていくこと」とし、友達の良い点を取り入れて自身の活動を行うことを目指している。

このように学生たちは、各自が課題とすることを踏まえながら、本授業での計画している内容を理解した上で、授業のねらいを立てていることが分かった。これは、質問項目(2)「(履修カルテの記載内容を通して)幼稚園教諭となるために「自身が課題とすること」は何か」を主として、質問項目(1)や(3)における学生たちのレポート記載内容やインタビュー内容からも、質問項目(4)に関連する同様の内容が挙げられていることから分かる。そのなかでも、ここでは前述のTさんやUさん、さらにはMさんが「自信を深めること」を挙げていることに注目したい。この時期、多くの学生は就職先が決定すると、幼稚園教諭となることを強く意識し、内省を深めていく。今回はTさんやUさん、Mさんが「自信を深めること」をねらいとして挙げているが、これは本授業を履修し幼稚園教諭となる学生全員の課題であると考えられる。現にこの時期になると、毎年多くの学生が就職に対する様々な不安を口にしていることから、これは明らかであろう。では、この学生たちの不安を少しでも解消し、教員として最小限必要な資質能力を形成していくためには、どのような学びが必要なのであろうか。この点については、後述していくこととする。

#### (5) 受講中の自身の変化(初期・中期・後期等にわけて考え方の変化を記す)

《レポートの記載内容から》

初期の頃は、自己紹介などの製作で「これで大丈夫!」と思って作ったものが、周りの(仲間が)作ってきたものと比べて簡素なもので、「もっと可愛く、面白く作ればよかった」と思うことがありました。自分の「大丈夫」の基準が低いということにここで気づいて、周りからの刺激があって、もっと頑張ろうと思えた時期でした。中期では、一人で(部分)実習し、絵本の読み聞かせを行いました。(中略)しかし、ここでも周りが完成度の高い活動内容を持って来ていて、自分も何か違うことに挑戦すべきだったかなと思いました。いつも苦手なことから逃げちゃうクセがあり、ここでもそう感じてしまいました。でも、ここで得意なことを行い、子どもたちと楽しい時間を過ごせたことで、目標としていたコミュニケーションがたくさんとれました。子どもたちの声を聞きながら活動を進めることができ、とても充実した活動となりました。(中略)後期では、グループでの活動を行い、みんなの意見を取り入れた楽しい活動を行うことがで

きました。今まで自分の意見をかなり大切にしていた私自身ですが、今回の授業を通してみんなの素晴らしい作品をたくさん見てきて、周りの意見と合わせたらもっと良くなると思うことができました。実際に子どもたちの前で発表したとき、子どもたちの表情を見て、反応を見て、みんなで楽しめたのは仲間を信頼できたからであり、グループでやるとこんなにも自信をもって楽しめるんだと気づきました。(Hさん)

〔初期〕一番初めに自己紹介をやったときに、凄く緊張してしまい、この先こういう発表がたくさんあるんだろうと予想すると嫌だなと思っていました。また、今まで授業の発表や模擬授業でたくさん人前に立ってきたのにまだ緊張しているのかと思うと、この先大丈夫かなというところしか考えていませんでした。〔中期〕1回目の幼稚園へ行ったときや「ねずみくんのチョコッキ」(ペープサート)をやったあたりからは、自分に足りない部分や工夫するべきことが発見でき、次はこうやってみようかな、次はこういうふうに関わってみようかなというふうに分かるようになってきました。〔後期〕1月に入ってからは幼稚園に行くということで、今までやってきたことの反省や課題を活かして、実習に取り組もうとしました。実際にやってみると、反省・課題だらけでしたが、保育は試行錯誤の連続であり、経験していくことが大事であることが分かり、これから担任を任せられたら色々なことに挑戦していこうと思いました。(Sさん)

初期では、みんなの前に出てお話をすることに対して恥ずかしさがありました。また、発表が終われば、レベルの高いことをしなくても乗り越えられるといった気持ちがどこかにありました。中期では、他のみんなの発表から(ペープサートでの人形の動かし方や様々なセリフを参考にするなど)元の自分で考えたものにプラスしていくことに挑戦しました。少しずつ良いところを真似していくと、より良いものができ上がるので、この方法は続けていきたいです。そして後期では、子どもたちの楽しめるものにしようという思いがあり、特にグループで取り組んだ活動の中で意見を出していくように心掛けました。ただ、子どもたちの前に行き、何となくの気持ちで終わらせてしまうのではなく、初期で考えていたレベルの高さを求めるようになっていました。グループで子どもたちが一緒に楽しめるもの、盛り上がるものを考えていくことは、初期の私には考えられないことでした。このように、初めに考えていた発表に対する気持ちが変化し、違う視点で見ることができるようになったのかなと思います。(Aさん)

〔後期〕最後のグループでの発表に向けた活動では、互いに意見を出し合いながら、より良いものを目指し、何時間もかけ準備した。1つ1つでき上がっていくのが嬉しく、楽しい気持ちで活動することができた。15回の授業を通して、こんなにも気持ちの変化を感じることができるとは思ってなかったが、子どもたちに楽しんでもらいたいという思いのもと、見せる側である私たちも楽しく活動することができて良かった。(Oさん)

《インタビュー内容から》

〔初期〕

Hさん：何かみんなが作ってんの見て、凄いな～と思いつつ、まだプライドの高さ捨て切れてない時期なので、「これで大丈夫、これで大丈夫」って。

Tさん：すごいよく分かる！

Hさん：作るものはこれで大丈夫。あとはもう前に出て自分が演じればオッケーみたいな。そういう状況です。そういう感じですね。

インビュア-2：わかるわかるってのは、自分もそうってこと？

Tさん：そう。何かさっきも言ってたけど、何か友達に負けたくないみたいな。すごいよく分かる、そう。何かそう、どう高めてくかとかそういうことじゃなくて。

Hさん：もう最初からどの位の高さから突っ込んでって、みんなをちょっと「お～」って言わせるかみたいな感じだったけど、うん。

〔中期〕

インビュア-2：できると思ったきっかり何なんですかね？

Uさん：え～何だろう？その1回目みんなの前で発表して、「変わってるねえ」「声変わったね～」って言ってもらえたこと？だと思いましたが、なんか自分でやってたら、よく分からないじゃないですか。変わってるのか、変わってないのか。自分では変えてるつも

りでも、あんまり変わってなかったり。うん、でもそう言ってもらって、観てもらって気づかせてもらったことがきっかけです。

Hさん：なんか先生たちが言っていたことを取り入れて直してみたものの、なんか自分の中で納得がいてなくて、も～～と思いながら、もう終わっちゃえと思ってやった結果、みんなが凄く頑張ってるなあと思って、そう。終わってみたら、なんか自分が全然ダメじゃんと思って、なんかその辺りから取り入れて、なんか自分だけじゃ、自分の考えだけで凝り固まってちゃダメだなあと思って、う～ん。気持ちに変化が出てきたかな。

#### 【後期】

Tさん：うん、でもこのなんか一緒にグループでやったことで、なんかその、なんかどっか聞くのが嫌だったりかしていた部分が、こう話していくうちに無くなったりして、なんか自分のこともちゃんと認めてくれるっていう、なんかその環境じゃないけど、その認めてくれる人が居るっていうのが、なんか大きいのかなあと思って。(中略)でも今回でHさんとAさんと一緒にやって、なんかこっちも良いとこは認めて、向こうもこっちの良いところ認めてもらってっていう環境でやってくと、凄く楽しくみんなやってけるんだあっていうのも感じたし、Hさんもさっき言ってたけど、頼るっていうことが負けじゃないみたいなこと言ってたけど、そうなんか、頼って良いんだあっていうか、もっと聞けばよかったなあみたいな、もっと前から頼れば良かったなあみたいなのは思いました。

Uさん：歌があったじゃないですか。「大きな栗の木の下で」というのをアレンジした歌があったんですけど、私もなんか、これでいいのかなあっていうのはあったんですよ。もっとこうしたいなあとかはあったんですけど、やっぱ、何か、甘えちゃったっていうか、3人居るからこれでいいかなあって。ここで私がこう何か言って、また何か波風を立てたら、う～んっていうのもあったし、2人に甘えて、う～ん、このままこれでいいよって言って。で、う～ん、煮え切らないまま本番に行っちゃって。だから何だろう、3人でやって良かったかって言われると、私はなんか甘えてしまった、自分の中で。3人居るからいいやって思っちゃって、う～ん。だから何だろうなあ、あの、みんなみたいに何か高め合えなかったのが凄く残念でした。その3人というグループを活かしきれなかったです私は、う～ん。

以上の内容から、学生たちは初期から中期、後期にかけて、友達や活動をとにもにするグループの仲間との関わりから様々な刺激を受けており、彼らとの学び合いを通して自身の課題と向き合い、葛藤や戸惑い、成長や変化を感じながら授業を受講していることが分かる。

まず【初期】では、Sさんは「一番初めに自己紹介をやったときに、凄く緊張してしまい、この先こういう発表がたくさんあるんだろうと予想すると嫌だなと思っていました」とし、Aさんも「発表が終われば、レベルの高いことをしなくても乗り越えられるといった気持ちがどこかにありました」としており、授業方法やその内容に対して消極的な姿勢であったようである。またHさんは、『何かみんなが作ってるの見て、凄いな～と思いつつ、まだプライドの高さ捨て切れてない時期なので、「これで大丈夫、これで大丈夫』と授業に取り組んでいたものの、仲間の授業に対する姿勢や取り組む姿を目にすると、次第に『自分の「大丈夫」の基準が低いということにここで気づいて、周りからの刺激があって、もっと頑張ろうと思えた』と気持ちが変化したことを述べている。

次に【中期】では、Sさんは「自分に足りない部分や工夫するべきことが発見でき、次はこうやってみようかな、次はこういうふうに子どもたちと関わってみようかなというふうに自分の中で課題ができ、前向きに考えるようになりました」とし、Aさんも「他のみんなの発表から(ペープサートでの人形の動かし方や様々なセリフを参考にするなど)元の自分で考えたものにプラスしていくことに挑戦しました」として、友達や仲間からのアドバイスや彼らの発表内容等を参考にして、前向きに活動する姿が見られるようになっている。またUさんも、『(自作のペープサートを)1回目みんなの前で発表して、「変わってるねえ」「声変わったね～」って言ってもらえたこと?だと思いました。(中略)

うん、でもそう言ってもらって、観てもらって気づかせてもらえたことがきっかけです』としており、友達や仲間からの肯定的な評価を受けたことで、苦手だった読み聞かせに対して「やろうと思えばできる」「自信がついた」とインタビューでは発言している。さらにHさんは、「(ペープサートの発表が)終わって見たら、なんか自分が全然ダメじゃんと思って、なんかその辺りから取り入れて、なんか自分だけじゃ、自分の考えだけで凝り固まってちゃダメだなあと」としており、他者の意見や良い部分を認め、それらを自身の活動に取り入れていこうとする気持ちの変化が出てきたとしている。

さらに〔後期〕では、Aさんは「初めに考えていた発表に対する気持ちが変化し、違う視点で見ることができるようになった」とし、Oさんは「15回の授業を通して、こんなにも気持ちの変化を感じることができるとは思っていなかったが、子どもたちに楽しんでもらいたいという思いのもと、見せる側である私たちも楽しく活動することができて良かった」としており、友達や仲間との関わりや幼稚園における部分実習等を通して、授業や発表等に対する自身の気持ちの変化に気づいたとしている。またHさんは、「今まで自分の意見をかなり大切にしていた私自身ですが、今回の授業を通してみんなの素晴らしい作品をたくさん見てきて、周りの意見と合わせたらもっと良くなると思うことができました」とし、Tさんは「一緒にグループでやったことで、なんかその、なんかどっか聞くのが嫌だったりとかした部分が、こう話していくうちに無くなったりして、なんか自分のこともちゃんと認めてくれるっていう、なんかその環境じゃないけど、その認めてくれる人が居るっていうのが、なんか大きいのかなあと」としており、グループの仲間との活動を通して、他者を受け入れ、信頼し、高め合いながら協力して活動していくことの大切さに気づくことができたとしている。しかしその一方で、Uさんは「3人でやって良かったかって言われると、私はなんか甘えてしまった、自分の中で。(中略)みんなみたいに何か高め合えなかったのが凄く残念でした」とし、グループの仲間との協力関係が構築できず、納得のいくような学び合いができなかったとしている。

このように個々の活動を中心とした〔初期〕では、学生たちは授業方法やその内容に対して消極的な姿勢であり、仲間の発表等を受け入れられない様子も見られたものの、同テーマでのペープサート発表や討論、グループでの模擬保育の企画・幼稚園における部分実習等の仲間との協働的な活動を中心とした〔中期〕〔後期〕では、活動をともしにする友達やグループの仲間との積極的な対話や活動、幼稚園の子どもたち等との関わりを繰り返していくなかで、次第に他者を受け入れられるように気持ちに変化していき、その結果、友達や仲間との学び合いを通して自身の課題と向き合い、それを克服しようと努力したり、友達や仲間の良い部分を取り入れて改善したりする姿、また他者に認められ、活動に対して自信がもてるようになる姿などが見られるようになっていった。これは本授業では、活動の流れ(表2参照)を大きく4つにわけた上で、①個々の活動からグループの活動へと学生の活動単位を変化させ、他者と対話し、友達やグループの仲間と学び合う機会を増やしていったこと、②同一テーマでの発表や討議等を2回繰り返すことで、PDCAサイクルを意識しながらそれぞれの活動を丁寧に行う機会を確保したことが、大きく関係していると考えられる。現代の学生たちにとっては、上述のように仲間を信頼し、安心感をもって仲間同士で学び合い、深め合う具体的な経験を経ることが、個々の学生が課題としていた点も含め、教員として必要最低限な資質能力を形成するために必要な学びへと繋がっていくのではないだろうか。しかしHさんのように、同一テーマの発表を行うことで他者と比較されることに抵抗を感じる学生、またUさんのように、グループの構成メンバーの組み合わせによって学びを深めることが難しい学生も居ることからも、今後は各年度の受講生が抱える

教師となるため必要な課題、各学生の進路や性格特性等に配慮した授業展開内容を具体的に設定していく必要があるだろう。

#### (6) 授業時間内外の仲間との関わり (思い出に残る指導の内容等)

##### 《レポートの記載内容から》

今までの大学生活の中で友人に評価してもらったり、お互いの活動に意見し合うといったことはあまり無かったため、今回この授業でたくさん意見し合ったのは、とてもよい経験になったと思う。(中略) 自分の活動を観てもらった時には、自分の目には届いていなかった子どもたちの様子や「自分だったらこういう風にした」という友人の考えも伝えてくれて、自分の改善点や違う見方、考え方を知ることができた。また、自分が友人に対して自分の考えや気づいた事を伝えるということを自分自身があまりしてこなかったが、今回のようにお互いの考えを伝え合うことで、考え方も広がり、自分とは違う視点での見方も知ることができたので、友人に限らず、他の人の意見を聞くこと、一緒に意見を出し合って進めていくことの大切さを実感することができた。(Tさん)

授業外の時間にもペープサートをお互いに見せ合い、アドバイスを貰いながら作っていたり、グループの人と集まって練習したりと、この関わりは自分が職場で先輩や同僚と協力して活動を考えるといった模擬体験をしているようにも思えた。(Yさん)

練習を友人に見てもらい、「楽しいね」や「なるほど、面白い」と声を掛けてもらうと自信につながる。また、改善した方が良い点についても言ってもらえると、本番よりよい発表をすることができる。作っているもの、行っていることはそれぞれ違っても、目標は同じで達成するために一緒に頑張る仲間がすぐ傍にいることは心強いことであると感じた。そしてそこには、自分が育つプラス要素しか存在しないということを実感した。(Oさん)

授業を受講している仲間、それぞれがみんな協力をし合ったり、互いにいい所を褒めたり、直したらもっと良くなる所を教えたり、一緒に考えたり、製作の手伝いをしたりと全員で授業を作ってきた、乗り越えてきたと思います。(Mさん)

##### 《インタビュー内容から》

Tさん：あとなんか、一番なんか良かったなって思ったのは、あの最後の話し合いです。(中略) なんか今までその、自分の殻に閉じこもって生きてきたっていうか、友達とかになんか頼ったりとか深く関わろうっていう気も正直あんまりなくて、そういうところ見せてこないで生きてきた中で、なんかあの授業でああやって自分の本心を話して、なんか受け入れてもらって、なんかこういう仲間が居るのっていいなあとか思ったり。なんかもっと最初から自分出してけば良かったなあとか思うこともあって。それが一番良かったかなあと思います。(中略) なんかいつも気張ってるっていうか、良く見られようみたいな。そういうのばっかりで、嫌だなあって思ってたんですけど。でもこうやってなんか弱み見せてとか本音話してっていう環境とか仲間ができたっていうのは、良かったなって思いました。(中略) ダメなところはダメって言ってくれたり、なんか向こうがちゃんと、なんか向き合ってくれるじゃないけど。そういう姿勢を見せてくれたからこそ、こっちもなんか、なんかほんとの自分見せようかなって思ったりとか思ったし、それで言っても、なんかみんなちゃんと受け止めてくれるし、話聞いてくれるし。なんかそんな表面上だけだった付き合いが、もっと深くなったなあみたいな。

以上の内容から、学生たちは授業時間内外の仲間との関わりを通して、「友達やグループの仲間と意見を交わし、協力して活動を作り上げていくことの大切さ」「保育現場における同僚との協働の必要性」「同じ目的をもつ仲間の存在が、自身の支えとなり、自信に繋がること」を実感していることが分かった。例えば Tさんは、「今回のようにお互いの考えを伝え合うことで、考え方も広がり、自分とは違う視点での見方も知ることができたので、友人に限らず、他の人の意見を聞くこと、一緒に意見を出し合って進めていくことの大切さを実感することができた」とし、Mさんは「授業を受講している仲間、それぞれがみんな協力をし合ったり、互いにいい所を褒めたり、直したらもっと良くなる所を教えたり、一緒に考えたり、製作の手伝いをしたりと全員で授業を作ってきた、乗り越えてきたと

思います」としており、受講する友達やグループの仲間同士が主体的にコミュニケーションを取り、互いの考えを伝え合ったり、協力し合ったりすることを通して、より学びが深まっていったことを実感している。また Y さんは、「この（授業外の）関わりは自分が職場で先輩や同僚と協力して活動を考えるといった模擬体験をしているようにも思えた」としており、授業外における友達やグループの仲間との活動を通して、今後の保育現場における同僚との協働の必要性についてイメージできたとしている。さらに O さんは、『練習を友人に見てもらい、「楽しいね」や「なるほど、面白い」と声を掛けてもらうと自信につながる。（中略）作っているもの、行っていることはそれぞれ違っても、目標は同じで達成するために一緒に頑張れる仲間がすぐ傍にすることは心強いことであると感じた。そしてそこには、自分が育つプラス要素しか存在しないということを実感した』としており、卒業後に幼稚園教諭として働こうとする仲間（受講生）との関わりや存在が、自身の支えとなり、自信に繋がっていると実感できたとしている。加えて T さんは、「ダメなところはダメって言ってくれたり、なんか向こうがちゃんと、なんか向き合ってくれるじゃないけど。そういう姿勢を見せてくれたからこそ、こっちもなんか、なんかほんとの自分見せようかなって思ったりとか思ったし、それで言っても、なんかみんなちゃんと受け止めてくれるし、話聞いてくれるし」としており、授業において友達やグループの仲間と真摯に向き合い、本音で話し合える環境があったからこそ、自身の心が解放され、最後には仲間を信頼することができたとしている。

このように学生たちは、授業時間内外の仲間との関わりについて肯定的に捉えており、授業時間内外で仲間と互いの意見を交わし、共に考えたり、協働的に活動していったりすることの意義やその必要性を実感していることが分かった。特に T さんは、本授業の受講前までは、誰かに相談したり、頼ったりすることは嫌で、「誰にも負けたくない」「誰かに頼ることは負け」「友達からの意見をもらうことは避けてきた」「友達を頼ったり深く関わろうともしてこなかった」「本心を話すのは苦手で、自分を知られないように生きてきた」「課題は人より完璧にこなし、常に人より上でいたい」等という気持ちが強かったと話している。しかし、授業内外における友達やグループの仲間との関わりを繰り返していくなかで、次第に「自分より頑張ってる人も凄い人もいっぱいいると気づいた」「自分のできなさを実感した」「人に頼ってもいいんだ」「仲間が私に向き合ってくれる姿勢を見せてくれたから、私も本当の自分を見せようかなと思った」「みんなは意外と私の細かな所までを見てくれているんだと思うと、嬉しくて泣いちゃう」等のような気持ちに変化していったと話しており、第 15 回目（これまでの活動の振り返り、グループで互いのこれまでの活動を認め合う）の授業後には、これらの実感をより深めることができたとしている。これらのことから、学生に自己の課題を自覚させ、主体的にその解決に取り組むことを促すためにも、教職実践演習においては、具体的な授業内容に応じた学生同士のグループ活動（例えばグループ討議やロールプレイング、グループでの指導計画案作成・模擬保育、事例検討など）をどのように取り入れていくことが望ましいのか等について、今後も検討を重ねていく必要があると考える。

#### （7）授業時の先生方との関わり（思い出に残る指導の内容等）

《レポート記載内容から》

幼稚園での活動を終えて反省をしている時に、先生から「よく準備したね。準備することは大変だけど、本当に大切なことだよ」と声を掛けてもらった事がとても印象に残っている。以前から心掛けていたことを認めてもらえたことが本当に嬉しかったし、今後も大切に



しようと思えた。このことが自信に繋がった気がした。自分が行った活動に対し、自信も無く反省点ばかりを見つけてしまうような中で、先生は必ず認める言葉を掛けて下さった。一つでもそのような言葉掛けをかけてもらえると、不思議と自分でも自分の良かった部分を認めることができた。これはきっと幼児に対しても同じだと思う。だから自分が幼稚園教諭になった際には、幼児の姿をよく見て認める声掛けをしたいと思った。指導の中には、褒める、認めるという事も大切であると実感した。(Tさん)

(1回目の実習後の反省会で)他の子のように演じたり、うまくメリハリを付けたりすることができないという私に対して、(先生は)誰かの真似をして無理に演じようとするのではなく、家や学校、バイト先などそれぞれの場所で自然と色々な自分を演じ分けているのと同じように、子どもたちの前でも自分らしさを消さずに接していけるといいですね、という旨の話をして下さいました。(中略)「あの子にはできて、どうして私にはできないのか」と自分らしさを恨んでいた私にとって、そのお話は自分で自分を認めるきっかけとなりました。あの子にはできないかもしれないけれど、自分なりの方法を見出だしていこうと考えられるようになり、無いものねだりだった自分に気づくことができました。(Uさん)

個人の活動でもグループの活動でも、先生方は順に回ってきて下さり、自然と相談できる機会がありましたが、各々の考えを尊重してくれていたように思います。活動の前には必要以上にアドバイスをせず、(中略)終わった後に具体的なアドバイスを下さった気がします。「自分で考えること、自分で気づくこと」が大切だからそうして下さいのかなと考えました。その分、反省しやすく、次はもっと良い活動にしようという気持ちになれました。(Yさん)

《インタビュー内容から》

Tさん：(ペープサート作成)1回目の時に全部完成して部屋で待ってる時に、なんか全然、紙の質とか考えてなくて、ただ割り箸ポーンって貼っただけで。で、みんななんか、こうT字にしたり繋げたりして、「あっそうか、そうやんないと崩れちゃうか!」と思って。あ、そういうとこ足んないよなあっていうのには気づかされたかなあ、1回目の時。うん、そういう発想も大事だなあと、思って、で先生たちのアドバイス聞いて、なんかそういう子どもたちの視点での、あの、こういう工夫とかも大事だけど、その後の、何て言うんだろう、何回でも使えるとか、そっちの工夫も必要なんだって思って。(中略)まあ、一人で抱え込むより、そういう風にいろんな人に聞いた方が色んなのくれるなっていうのは、初期の時に感じて、一人よりもみんなでやった方がいいんだなあっていうのと、あと一歩のどこを考えてないところが、フフフフ(笑い)そう、付け方とか、そういうのちょっと足んないよなあっていうのは思っていました、その頃は。

以上の内容から、学生たちは授業時の先生方との関わりを通して、「自身の行いを認める声を掛けてくれたこと」「保育技術や教材作成に関する具体的なアドバイスをもらったこと」「学生たちの主体的な活動を尊重した関わりやアドバイス」が印象に残っていることが分かった。例えばTさんは、「自分が行った活動に対し、自信も無く反省点ばかりを見つけてしまうような中で、先生は必ず認める言葉を掛けて下さった。一つでもそのような言葉掛けをかけてもらえると、不思議と自分でも自分の良かった部分を認めることができた」とし、その経験を通して「自分が幼稚園教諭になった際には、幼児の姿をよく見て認める声掛けをしたいと思った。指導の中には、褒める、認めるという事も大切であると実感した」としており、先生方の活動を認める言葉掛けが、学生自身の活動に対する自信を生み、その経験から指導における褒めること・認めることの大切さを実感したとしている。またUさんは、先生からのアドバイスを受け、「あの子にはできないかもしれないけれど、自分なりの方法を見出だしていこうと考えられるようになり、無いものねだりだった自分に気づくことができました」とし、Tさんはペープサート作成時に「先生たちのアドバイス聞いて、なんかそういう子どもたちの視点での、あの、こういう工夫とかも大事だけど、その後の、何て言うんだろう、何回でも使えるとか、そっちの工夫も必要なんだって思って」としており、先生方より具体的なアドバイスを受けたことで、学生たちは保育技術や教材作成等に関して別な視点からも考えられるようになったとしている。

さらにYさんは、「(先生方は、)活動の前には必要以上にアドバイスをせず、(中略)終わった後に具体的なアドバイスを下さった気がします。(中略)その分、反省しやすく、次はもっと良い活動にしようという気持ちになれました」としており、学生たちの考えを尊重しようとする先生方の関わり方やアドバイスによって、より良い活動にしようとする主体的に取り組む気持ちになれたとしている。

このように学生たちは、授業時の先生方との関わりに対して肯定的に捉えており、先生方から個々の悩みや課題に応じたアドバイスを受けることで、主体的に授業や活動に取り組んでいることが分かった。しかしその一方で、今回の「課題レポート」と「インタビュー」は授業担当者によって採取されたものであることから考えても、その内容に関しては一定のバイアスが掛かっていることは考慮すべきであろう。また反対に、今回の学生の回答内容を受け、授業担当者による授業時の学生との適時・適切な関わり方についても、より計画的に行わなければならないと考える。特に授業担当者が複数いる場合は、教員による学生情報(授業の取り組み、教員になる上での課題など)の把握や共有、授業内容の振り返りや改善点の検討などを定期的に行うことで、教員同士が連携しながら、丁寧な授業運営を心掛けていく必要があるだろう。

(8) 授業を受講し終えて感じる事(反省、自身の気持ちや考え方の変化、この授業で学びかったこと等)

《レポート記載内容から》

授業を終え思うことは、自分自身を過信し過ぎず、もっと学びを深めていくことです。「これでいいや」「これで大丈夫」と思うことが多い私ですが、「もっとできる」「もう少しやってみよう」と前を向いて学んでいく気持ちが大切だと思いました。今回の授業で周りの友人の活動をたくさん観ることができて、刺激を受けると同時に、たくさんの知識をもらいました。良い所は盗む精神で今後取り入れていきたいと思えます。(Hさん)

自分で「できる」と思っていたことが「できなかった」ということに気づけたり、「楽しさ」「難しさ」両方にも気づくことができました。でも、できないことがあったり、難しいからこそ、とことん考え、もっともっとと向上心を持って取り組むことができるのかなと思えました。これからは現状に満足するだけでなく、課題や反省を大切に向上心を常に持っていきたいと思えます。そして、この授業を通して、活動以外にも連絡帳の書き方や保護者の方たちとの接し方など、不安で分からないことも多々あることに気づくことができました。「本」を読んで学んだり、先生方に今後質問をして分からないことを少しでも減らしていけたらいいと思えます。(Yさん)

この授業では、どの授業よりも人の前に出て発表するということが多かったと感じている。(中略)人の前で発表するということは、自分の何かを人に見てもらい、見られるという事である。そこには常に恥ずかしさや緊張するという気持ちが今まではあった。しかし、この授業を通して繰り返し、何度も何度も経験していくうちに、マイナスイメージのある気持ちから、楽しい、見てもらいたいというようなプラスの気持ちに変化していった。(中略)この授業を通して、見てもらうこと、発表することに対して喜びや楽しさを感じることができたのが一番の収穫である。(Oさん)

部分実習やペーパーサートの様子を先生方がビデオに記録してくれており、初めて子どもたちの前に立つ自分・演じる自分を観ることができました。ビデオに映った自分の姿を観ているのはとても恥ずかしく、目を逸らしたくなるほどでしたが、「自分は他の人からこんな風に見える」という今まで気づけなかった部分や新たな反省点・改善点を見出すことができました。色々な意味で自分と向き合うことができたように思います。(Uさん)

《インタビュー内容から》

Sさん:録音は平気なんだけど、やっぱり自分が写ると、ちょっと恥ずかしさはあるけど、こういう風に大きく動いてるつもりでも実際見たら全然動いてないじゃんっていうのは、凄く分かるから。あと顔とかも凄くニコニコしてるつもりでも、ちょっとひきつ

つてたりとか、そういう確認・改善のためとして見るっていうので良いと思う。

以上の内容から、学生たちが授業を受講し終えて感じることで、多くの学生が「自分自身に対する新たな気づき」「幼稚園教諭となるための新たな課題の発見」を挙げていることが分かった。また、授業方法の1つとして「映像記録された自身の保育する姿を客観視することの意義」について記述する学生もいた。例えばHさんは、『授業を終え思うことは、自分自身を過信し過ぎず、もっと学びを深めていくことです。「これでいいや」「これで大丈夫」と思うことが多い私ですが、「もっとできる」「もう少しやってみよう」と前を向いて学んでいく気持ちが大切だと思いました』とし、Yさんは『自分で「できる」と思っていたことが「できなかった」ということに気づけたり、「楽しさ」「難しさ」両方にも気づくことができました』としている。またOさんは、「この授業を通して繰り返し、何度も何度も経験していくうちに、マイナスイメージのある気持ちから、楽しい、見てもらいたいというようなプラスの気持ちに変化していった。(中略)この授業を通して、見てもらうこと、発表することに対して喜びや楽しさを感じる事ができた」としており、学生たちはこれまでの経験を振り返りつつ、自身の新たな面や気持ちの前向きな変化に気づくことができたとしている。さらにYさんは、「この授業を通して、活動以外にも連絡帳の書き方や保護者の方たちとの接し方など、不安で分からないことも多々あることに気づくことができました」としており、幼稚園教諭となるための新たな課題を発見できたことと今後の意気込みを述べている。加えてUさんは、『「自分は他の人からこんな風に見える」という今まで気づけなかった部分や新たな反省点・改善点を見出すことができました』とし、Sさんは「こういう風に大きく動いてるつもりでも実際見たら全然動いてないじゃんっていうのは、凄く分かるから。あと顔とかも凄くニコニコしてるつもりでも、ちょっとひきつってたりとか、そういう確認・改善のためとして見るっていうので良いと思う」としており、授業において映像記録された自身の保育する姿を観ることにに対して抵抗感はあるとするものの、自身を客観視できることで、活動に対する改善点を見出すことができるとしている。

このように学生たちは、本授業の受講後には、教職生活を円滑にスタートさせるために不足している自身の課題に照らし合わせた上で、不足している知識や技能が身につけられたことを確認したり、自身の思考の広がりや肯定的な変化を実感したりしていると同時に、改善すべき具体的な点を見出し、今後も意欲的に学び続けていこうとする姿があることが分かった。今回、このような学生の姿を生み出すきっかけとなったのは、HさんやOさんも述べているように友達や仲間、幼児などとの「他者との関わりや学び合い」であるとしている。仲間との関わり(4-(6))や先生方との関わり(4-(7))による学生の学びの効果については前述してきたが、4-(5)でも触れた模擬保育における幼児たちとの関わりも含め、本授業では繰り返して行われた他者との関わりや学び合いの機会が、学生たちに新たな気づきや考えをもたらし、最終的には主体的に学んでいこうとする姿勢を育てていったのではないかと考えられる。また、UさんとSさんが述べている「映像記録された自身の保育する姿を観る」という経験も、自身の活動を客観視し、改善点を見出だしていくには有効であったようである。しかし、学生たちも述べているように自身の映っている映像を視聴することは、恥ずかしさから抵抗を強くもつ学生も多いことから、今後は映像記録の提示の仕方やタイミング、観察視点の設定等を検討し、より学習効果を高めることのできる有効的な方法論について検討する必要があると考える。

(9) (教職に就くにあたっての) 今後の課題  
 《レポート記載内容から》

「子どもたちを主に」「ねらいは何なのか」「準備は念入りに」「やりっぱなしで終わらせない、反省・振り返りまでやる」ということは最低限忘れずにいたいと思います。特に「反省・振り返り」を意識していきたいです。(中略)「昨日よりも明日」という言葉がありますが、私も教職に就くにあたって、昨日よりも今日をより良くしようという気持ちを持っていきたいです。(Yさん)

これから子どもたちと共に生活していく上で、これまで大学で学んできたことや実習で学んだことから、様々な視点から物事を考え、予想される子どもたちの発言や行動に対応できるようになることです。実習や模擬授業から自分が予想していないことがたくさん起こり、まだまだ考えが甘いなと感じさせられました。(Sさん)

就職する前に大学での授業を振り返って、学んできた事をしっかりと現場で行えるようにしたい。そして、これまで心掛けてきた準備を怠らないこと、これから心掛けていきたいといった自分の考えもきちんと伝えられるようになるということをしかりと実行していきたい。何よりも努力を怠らず、常に目標として課題を持って頑張りたい。(Tさん)

以上の内容から、学生たちが教職に就くにあたっての今後の課題として、「反省・振り返りを意識する」「様々な視点から物事を考え、多様な子どもたちの姿に対応できるようにする」「努力を怠らず、常に目標と課題をもつ」等のことを挙げていることが分かった。例えばYさんは、『「子どもたちを主に」「ねらいは何なのか」「準備は念入りに」「やりっぱなしで終わらせない、反省・振り返りまでやる」ということは最低限忘れずにいたいと思います。特に「反省・振り返り」を意識していきたいです』として、今後教職に就いた際には子どもを中心とした保育を心掛け、保育のねらいを立て、それに応じた準備を行い、実践後の振り返り・反省を大切にしていきたいとしている。またSさんは、「これから子どもたちと共に生活していく上で、これまで大学で学んできたことや実習で学んだことから、様々な視点から物事を考え、予想される子どもたちの発言や行動に対応できるようになることです」として、これまで大学で学んできたことを振り返った上で、今後教職に就く上で「様々な視点から物事を考え、対応する」という自身の課題点を挙げている。さらにTさんは、「就職する前に大学での授業を振り返って、学んできた事をしっかりと現場で行えるようにしたい。そして、これまで心掛けてきた準備を怠らないこと、これから心掛けていきたいといった自分の考えもきちんと伝えられるようになるということをしかりと実行していきたい」として、大学での授業を振り返ることを通して、就職先では常に目標と課題をもって頑張りたいとしている。加えて、上述のレポート記載内容では取り上げられなかったが、「教材準備を怠らず、人前で上手に発表すること(Oさん)」のように、教材研究を基にした保育技能の向上について取り上げたり、「子ども一人一人を理解し、子どもたちの状態に合った環境を作れるように努力していきたい(Tさん)」のように、個々の子どもに応じた環境構成の必要性について取り上げたりなど、より具体的な課題を挙げる学生もいた。

このように学生たちは、卒業を前にして、本授業や他の授業で学んだことを改めて振り返っており、振り返った内容から各自が教職に就くにあたって不足していると考えた部分を今後の課題としていることが分かった。また多くの学生が、将来の職場において「子ども」「保護者」「同僚」等との関係を念頭に置きつつも、前向きな目標や意識をもって保育職に就こうとしている姿も分かった。これらのことから考えると、今回の学生たちは教職実践演習における科目の趣旨や目標を的確に把握し、それらに応じた形で本授業に対する振り返り、教職に就くにあたっての自覚を主体的に育てていくことができたのではないだろうか。しかし、この設問に関しては、今回インタビューにて詳細を確認することができなかつたため、この点に関しては今後の課題である。

## 5、研究のまとめ

これまで、筆者が前任校にて担当していた授業内容について、学生が授業履修後に提出したレポート記載内容、またそのレポート記載内容を基にした学生4名に対するインタビュー内容を「振り返りの9つの視点」にわけて分析・考察を行ってきた。その結果、学生たちは本授業の受講に関連して、以下のような学びの姿があることが明らかとなった。

- 1) 学生たちは、本授業が「学びの軌跡の集大成」であることをある程度理解した上で受講しており、受講するにあたっては様々な「不安」と「期待」を抱いていた。なかには、担当教員から一方的な指導を求めようとする受動的な姿も見られた。
- 2) 学生たちは、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動、実習内容等を振り返り、幼稚園教諭となるには何が不足しているのかなど、履修カルテの記載内容を通して各自の課題を客観的に捉えようとする姿が見られた。しかし、その課題自体が漠然としていたり、経験主義的な思考をしたりする学生も少なからずいた。
- 3) 学生たちは、幼稚園教諭となるために「サークル活動」「保育知識・技術の習得」「保育士資格取得のための学習」「普段の生活の見直し」「子どもと関わることのできる機会の確保」等を本授業の受講前から行うことを心掛けていた。
- 4) 学生たちの本授業におけるねらいは、「模擬保育を通した指導計画の作成や保育教材・技術の習得」「PDCA サイクルを通した計画的な学び」「様々な経験を通して自信を深める」「友達の良い点を取り入れて、自身の活動を行う」等であり、本授業での計画している内容を理解した上で、各自が幼稚園教諭となるために課題とすることを強く意識して授業のねらいを立てていた。
- 5) 学生たちの受講中の変化を〔初期〕〔中期〕〔後期〕の3期に分けて考えていくと、個々の活動を中心とした〔初期〕では、学生たちは授業方法やその内容に対して消極的な姿勢であり、仲間の発表等を受け入れられない様子も見られたものの、同テーマでのペーパー発表や討論、グループでの模擬保育の企画・幼稚園における部分実習等の仲間との協働的な活動を中心とした〔中期〕〔後期〕では、活動とともにする友達やグループの仲間との積極的な対話や活動、幼稚園の子どもたち等との関わりを繰り返していくなかで、次第に他者を受け入れられるように気持ちに変化していき、その結果、友達や仲間との学び合いを通して自身の課題と向き合い、それを克服しようとする努力したり、友達や仲間の良い部分を取り入れて改善したりする姿、また他者に認められ、活動に対して自信がもてるようになる姿などが見られるようになっていった。
- 6) 学生たちは、授業時間内外の仲間との関わりについて肯定的に捉えており、授業時間内外で仲間と互いの意見を交わし、共に考えたり、協働的に活動していったりすることの意義やその必要性を実感していることが分かった。
- 7) 学生たちは、授業時の先生方との関わりに対して肯定的に捉えており、先生方から個々の悩みや課題に応じたアドバイスを受けることで、主体的に授業や活動に取り組んでいることが分かった。
- 8) 学生たちは、本授業の受講後には、教職生活を円滑にスタートさせるために不足している自身の課題に照らし合わせた上で、不足している知識や技能が身につけられたことを確認したり、自身の思考の広がりや肯定的な変化を実感したりしていると同時に、改善すべき具体的な点を見出だ

し、今後も意欲的に学び続けていこうとする姿があることが分かった。

- 9) 学生たちは、卒業を前にして、本授業や他の授業で学んだことを改めて振り返っており、振り返った内容から各自が教職に就くにあたって不足していると考える部分を今後の課題としていることが分かった。また多くの学生が、将来の職場において「子ども」「保護者」「同僚」等との関係を念頭に置きつつも、前向きな目標や意識をもって保育職に就こうとしている姿も分かった。

以上のように明らかとなった学生の学びの姿からも、今回の教職実践演習の講義では、文部科学省が掲げている科目の趣旨が反映され、科目のねらいも概ね達成できたと捉えることができるのではないだろうか。では、これまで論じてきた内容や結果を踏まえて考えると、今後の教職実践演習ではどのような学びが求められるのであろうか。今後講義を行う上で改善・検討すべき点も含め、以下に2点について述べていくこととする。

まず、学生による協働的な学びの必要性である。これについては、先に取り上げた吉田・中尾(2016)や小林・寺田(2014)、山田ら(2016)、横田ら(2017,2018)においても同様の指摘がなされているが、本授業においても、これまでの結果を指示する形となった。4-(5)や4-(6)でも述べているが、学生たちは友達や仲間との協働的な学び合いを通して自身の課題と向き合い、それを克服しようと努力したり、友達や仲間の良い部分を取り入れて改善したりする姿、また他者に認められ、活動に対して自信がもてるようになる姿などが見られるようになっていった。他者との関わりが希薄となってきている現代の学生たちにとっては、上述のように仲間を信頼し、安心感をもって仲間同士で学び合い、深め合う具体的な経験を経っていくことが、教員として必要最低限な資質能力を形成するために必要な学びへと繋がっていくのではないだろうか。そのため教職実践演習においては、具体的な授業内容に応じた学生同士のグループ活動(例えばグループ討議やロールプレイング、グループでの指導計画案作成・模擬保育、事例検討など)をどのように取り入れていくことが望ましいのか等について、今後も検討を重ねていく必要があるだろう。

次に、同一テーマでの発表や討議等を繰り返し、PDCAサイクルを回していく必要性である。本授業では、活動の流れ(表2参照)を大きく4つにわけた上で、①個々の活動からグループの活動へと学生の活動単位を変化させ、他者と対話し、友達やグループの仲間と学び合う機会を増やし、②同一テーマでの発表や討議等を2回繰り返すことで、PDCAサイクルを意識しながらそれぞれの活動を丁寧に行う機会を確保した。これは個々の活動やグループでの活動において、同一テーマの発表や討議等を繰り返し、PDCAサイクルを回していくことで、学生たちは多くの場面で他者と向き合わなければならない機会が生まれるからである。同一のテーマの発表や討議等を行うことで、他者の行う活動や意見なども自身のこととして置き換えて理解しやすくなり、他者の視点に沿って気づきを共有したり、自分なりの言葉を用いて他者に対して意見を述べたり、より深く具体的な対話をしたりすることがしやすくなると考えられる。また、その一方で他者を強く意識するあまり、Uさんのように他者と比較をすることで活動に対して自信を失ってしまったり、HさんやTさんのように他者の発表内容等に対して優劣をつけたりしてしまう学生もいる。そのため、同一のテーマの発表や討議等を行っていく際には、初めは授業担当者が丁寧に関わり、発表や討議等が建設的な場となり、学びを深めていくことができるような雰囲気を用意して醸成していくことが必要となるであろう。また、活動内容やグループを構成する際には、各年度の受講生が抱える教師となるため必要な課題、各学生の進路や性格

特性等に配慮した授業展開内容を具体的に設定していく必要があるだろう。

## 6、おわりに

最後に本研究の反省と今後の課題について述べておく。

まず、本研究の反省と今後の課題として、質的データの採取対象や方法・内容の検討が挙げられる。今回は、本授業を履修した学生 11 名が履修後に提出したレポート記載内容と学生 4 名に対するインタビュー内容を基に検討を行ってきた。しかし時間やスケジュールの都合上から、インタビューは 4 名の学生にしかなることができなかつたうえ、設問 9 に関しては学生から具体的な話を引き出すことができなかった。本来であれば、まず提出された学生のレポート記載内容を十分に分析したのち、インタビューを通してデータを収集し、データの質を高めて「分厚い記述」となるよう調査を進めていくべきであったと考える。また、今回の「課題レポート」と「インタビュー」は授業担当者によって採取されたものであることから考えても、その内容に関しては一定のバイアスが掛かっているはずである。そのため今後は、その点を常に意識した上で、最善のデータの採取方法を検討していく必要があると考える。

もう一つの反省と課題としては、質的データの分析手法の検討が挙げられる。本研究では、学生のレポート記載内容とインタビュー内容を「振り返りの 9 つの視点」にわけて分析・考察を行ったため、項目ごとのデータ抽出・分析が中心となり、今回はデータの横断的な分析を行うことができなかった。また、様々な記載内容を多く取り上げてしまったため、なかには焦点が絞り切れず、漫然とした考察結果となってしまう箇所も少なからずあった。そのため、今後は取り上げるデータを精選し、本授業を受講していた学生たちの意味世界を追体験し、共感的に理解することができるような豊かな記述、的確な意味の翻訳ができるよう、今後もデータ分析手法やその技術の修得について検討を重ねていきたいと考えている。

### 《 謝辞・附記 》

本研究を進めるにあたり、当時授業担当者の一人であった岩崎淳子先生（大東文化大学文学部）には、より良い授業を実践するために貴重な助言、惜しみない御協力を賜りました。また、インタビュアーとしても御参加頂き、様々な点から御示唆を頂くことができました。ここに御礼申し上げます。

また、本研究の一部は、粕谷・岩崎（2017）「教職実践演習における授業展開の検討（I）—学生によるレポート記載内容の分析から—」第 1 回日本保育者養成学会研究大会（於：白百合女子大学）にて発表した内容を含んでいます。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（答申）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm)  
 （最終アクセス日：2020.2.1）

### 【参考文献】

- ・粕谷亘正 (2016) 「これからの幼稚園教員養成に求められるものとはなにか ―幼稚園教員養成に対する施策の動向と本学教育学科における幼稚園教諭養成課程の取り組み内容の検討―」 人間科学第 33 巻第 1 号
- ・粕谷亘正・岩崎淳子 (2017) 「教職実践演習における授業展開の検討 (I) ―学生によるレポート記載内容の分析から―」 第 1 回日本保育者養成学会研究大会論文集
- ・小林美貴子・寺田貴雄 (2014) 「学生の視点の拡がりと深まりをめざした授業分析 ―教職実践演習における試みを通して―」 北海道教育大学紀要 (教育科学編) 第 65 巻第 1 号
- ・佐藤郁哉 (2008) 「質的データ分析法 原理・方法・実践」 新曜社
- ・清水百合香 (2018) 『幼稚園教諭養成課程における「家庭との連携」に関する研究 ―教職実践演習の授業における学生の学びに着目して―』 創価大学教育学論集第 70 号
- ・中村治人・大岩みちの (2013) 「岡崎女子短期大学における教職実践演習 (幼稚園) 初年度実践報告 ―教職実践演習の実施に係る課題―」 東海教師教育研究第 27 号
- ・畠山大・西田直樹 (2014) 『「保育・教職実践演習 (幼)」の実践的研究 ―作新学院大学女子短期大学部の 3 年間の取り組みに基づいて―』 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部教職実践センター研究紀要 (1)
- ・山田悠莉他 (2016) 『「教職実践演習 (幼稚園)」における協同学習の効果 ―集団での学びに焦点を当てて―』 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要第 49 号
- ・横田典子他 (2017) 「教職実践演習における協同学習の効果② ―使命感や責任感、他者理解や学級経営に焦点を当てて―」 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要第 50 号
- ・横田典子他 (2018) 「教職実践演習における主体的な学びの効果 ―保育内容の指導能力の体得と保育者効力感を観点として―」 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域協働研究第 4 号
- ・吉田安規良・中尾達馬 (2016) 「沖縄こどもの国と連携した教職実践演習による学生の自己分析の変容 ―2014 年度卒業生の場合―」 琉球大学教育学部紀要第 88 号